

第六次総合計画 基本構想の検討にあたっての視点共有について

※波下線の引いてある箇所については遠藤会長のご意見を受けて追記。

●計画の目的と愛称について

第五次総合計画：「いきいき須坂 みんなのまちづくり計画」

第六次総合計画：「みんなの須坂みらいチャレンジ 2030」(案)

《愛称の意図》

- ・ チャレンジ=変動する時代を受け容れ、そこに対応していく決意
- ・ 課題への克服に行政だけでなく あらゆるステークホルダー（主体）が“オール須坂”で挑戦するという強い決意
- ・ 全員が主役になり 「みんな」で更なる須坂市発展に向けてチャレンジする決意

《検討の視点》

- ・ 言葉のイメージよりも、今後 10 年間の計画として行政と市民が共通にその方向性を認識できるような愛称とすること。
- ・ 目指す将来像の表現との違和感がないこと。

●目指す将来像について

第五次総合計画：「一人ひとりが輝き、磨かれた「ほんもの」の魅力あふれるまち 須坂」

第六次総合計画：「ほんもの」を受け継ぎ、しあわせを実感できる未来共創都市 須坂(案)

《将来像の意図》

(1) 将来像決定にあたり欠かせない要素

- ・ 「ほんもの」
「地域の宝」というこれまで大切にしてきた概念、今後も不変なものを将来に渡って継承していきたいということ。

【他の言葉での表現例】

成熟した、真の、地域愛、歴史がつなぐ、魅せる地域、いつまでも変わらない、ずっとこのままでいたい（ありたい）、須坂らしさ、魂のふるさと、真の故郷と呼びたい、住むことを誇れる、誇りの住まい、暮らしたいと心から思える、文化の薫る、人と文化で紡ぐ、歴史・文化・自然が織りなすネットワーク、人と自然の躍動、等。

- ・ 「ほんもの」が築き上げてきた延長にある「成熟した」「真の」状態を表現する。
（「ほんもの」は第五次計画でのキャッチフレーズであり、第六次計画では用いない。）

- ・物質的な表現にも捉えがちな「豊かさ」ではなく、「幸せ」を実現できること。
- ・絆（きずな）は作ろうと意図して作れるものではない。いわば「無形資産」（見えない力）の価値というものに注目してみる。この「無形資産」が形成されていることが須坂市の強みであり、今後も大切にしていけるべきもの。
- ・「見えないもの」を磨き高めることで、見えるものの数値を高め顕在化していく。

・「しあわせを実感」

今後の10年間では未曾有の人口減少に直面し、多様な価値観やライフスタイル、社会環境やテクノロジーなど、大きな「変化」が予想される。この中においても山積する課題を乗り越え、人生の根幹である「しあわせ」であることを実感できる都市を目指したいということ。

【他の言葉での表現例】

充実、豊かな心、仕合せ、安心、快適、夢を実現できる（かなえる）、夢を持ち続けられる、いつまでも健康で安心、日本一の幸せ実感、豊かさ実感、住んでよかった・住みよい、産業と自然の調和、人が煌めく、健康（幸）なまち、ゆったり歩む、等。

- ・須坂で“住まう”ことの幸せ感を表現する。

・「未来共創都市」

しあわせを実感できる未来を実現するため、必要なのは行政の支援だけでなく市民一人ひとりが自分事として役割を担う必要があること。地域のつながりを活かし、共創で取り組む姿勢につき、チャレンジを愛称に掲げる第六次計画の将来像に表現したいこと。

【言葉の表現例】

みんなが主役、市民リレー、私の手で切り拓く、新時代の交流と共創、未来キャンパスの創造、共創による将来への躍動、等。

- ・共創（Co Creation）から協創（Collaboration）へ。イノベーションを共に創出して成果を分け合う。
- ・都合のいい協働や共創ではなく、互いに切磋琢磨し合いながら、多少のスパイス感（適度な競争（Competition））をもたせ協創し合うことで次なる活力を生み出し、まちの価値を高めていく。

《検討の視点》

- ・言葉のイメージよりも、今後10年間の計画として行政と市民が共通にその方向性について疑わない（胸に落ちる）印象として表現されていること。
- ・第五次総合計画で用いてきた不変の魅力や須坂のよさを表す「ほんもの」という表現を第六次計画でどのように表現するのが良いか。
- ・「対外的なキャッチフレーズ」としての性格と「市民との共同の羅針盤としてのキャッチ

フレーズ」としての性格をどう重視し言語化するか。

- ・言葉の表現例にも挙げているように、言語化には無数のバリエーションがあるため、言葉の雰囲気や体裁ではなく、大切にしたいと思う概念を重要視し検討する。

● 3つのチャレンジ指針について

第六次総合計画：①「進化」②「継承」③「学びと共創」

分野別目標である基本目標の実現を目指すにあたり、共通のまちづくりの方向性を示したものの。全てのステークホルダー（主体）の共通行動指針としてイメージしている。

（参考）第五次総合計画：①「安心・安全」②「元気」③「交流」

※将来像を実現するための、まちづくりの基本となる考え方を示したものの。

《チャレンジ指針の意図》

- ・今まで行ってきたことはもちろん守り継承しつつ、ICT など新しい技術を取り入れ、暮らしや産業を進化させていくことの決意。
 - ・地域の歴史・文化をはじめ、須坂市の人や地域の絆が守ってきた宝を受け継ぐ仕組みと人をつくる（人づくり、真の地域づくり）こと。
 - ・求めるから分かち合い（愛）、与え合い（愛）、譲り合い（愛）の精神の下、一人ひとりが自分事として日々学びあい、地域や周囲の人々のために行動をおこすこと。
- ⇒これら3つの指針が全分野で意識され、展開され、将来の発展に向けたベクトルが延長線においてつながること。

● 基本目標（分野別目標）について

第五次総合計画

- ①みんなが助け合い、健康に暮らせるまちづくり
- ②子どもたちが未来に夢をもてるまちづくり
- ③豊かな自然あふれる地域環境を守り、安心して安全に暮らせるまちづくり
- ④多様な文化を学び育て、交流する創造的なまちづくり
- ⑤みんなの活力があふれるまちづくり
- ⑥みんなが快適に生活できるまちづくり
- ⑦みんなが主役のまちづくり

第六次総合計画

- ◎誰もが等しく幸せになるまち（新設）
- ◎子ども・若者が育ち、活躍するまち（※第五次計画の②に対応）
- ◎いくつになってもいきいき活躍できるまち（※第五次計画の①に対応）
- ◎災害に備え、地域がつながるまち（※第五次計画の③に対応し災害対策分野を別出し）

- ◎一人ひとりが学び、高め合うまち（※第五次計画の④に対応）
- ◎新しい仕事と雇用を生み出すまち（※第五次計画の⑤に対応）
- ◎都市と田園が連続した暮らしやすいまち（※第五次計画の⑥に対応）
- ◎市民に信頼される行財政を営むまち（※第五次計画の⑦に対応）

《検討の視点》

- ・今後、基本目標の下に基本施策が紐づく形となるため、行政分野の分野別体系として構成することが望ましいこと。
- ・全分野の施策を全ての市民で共創していくという意味では、活躍のできる機会や環境等が等しく保障され、取り残される人が一人としていないことが前提となる。各行政分野に属さない「暮らしやすい須坂」を実現するための決意として①（人権、平等・パートナーシップ分野）を別項目として出し構成している。（※総合計画策定委員会では、当然のことであるため、あえて基本目標として別出しすることには賛否両意見あり。）

（人権分野）

- ・ジェンダー平等を実現し、暮らしやすく、女性が活躍することを目指す。
（須坂市はむしろこうした部分が既に環境として整い、先行している。）
- ・新しい社会への対応、働きやすいほんものの幸せを実感できる地域社会を創る決意。

（子育て・教育分野）

- ・「子ども・若者が育ち」という表現は「子ども・若者を育み」とし、教育の重要性を地域の共通認識として捉えていく。
- ・子どもが素直に成長していく、その一助を地域が責任を持って担う。これにより、子どもが地域の想い（市が大切にしているもの）を継承していく。
- ・教育は地域愛を与え、将来、転出した子どもを地域へ還流させる力を持つ。

（高齢者・福祉・文化分野共通）

- ・人生100年時代の到来にあたり、「健康」に「高齢者」が活躍できることは重要。
- ・人生100年時代を先取りした豊かな地域社会を須坂市がモデルとして形成する。
- ・何歳になっても働ける、働くという選択肢でなくても地域社会との共存で幸せを実感できる。様々な価値観がもてる場所。＝「多様な幸せ」地域社会」の構築を目指す。
- ・高齢者も家の中で生計に加担しているような、シニアの経済力が充実している社会。増えていく高齢者が力を発揮することは地元の潤いにつながる。

（産業分野）

- ・中国等へ進出した企業の日本回帰を促す。
- ・付加価値を一層増やす先端技術関係の企業を積極的に誘致する。
- ・「隠れたチャンピオン」が群がり活躍する産業地域を目指す。